

古墳時代前期の炉石状土製品について

―市ノ塚遺跡・エグロ遺跡の事例と類例の集成―

かんばやしこうたろう
神林幸太郎

はじめに	4 炉石状土製品の出現と展開
1 栃木県内の炉石状土製品	5 栃木県における炉石状土製品分布の背景
2 関東地方の炉石状土製品	おわりに
3 炉石状土製品の特徴と機能	

古墳時代前期の集落遺跡である、市ノ塚遺跡とエグロ遺跡から出土した「棒状の土製品」について、類例の集成および検討を行った。その結果、これらの土製品は関東地方で広くみられる、地床炉の一端に炉石を設置する構造の一類型である可能性が考えられた。また、この土製品については弥生時代に房総地域で出現し、古墳時代前期に北関東地域に拡散する傾向が確認できた。栃木県内においてこの種の土製品が存在する背景には、房総地域に由来する人や情報の広がり的一端を反映しているものと思われる。

はじめに

弥生時代～古墳時代の前半にかけて、屋内炉の一端に「枕石」「縁石」「炉石」などと呼称される自然石（以下炉石）を設置する炉（以下石添炉）が確認される。関東地方では弥生時代中期ごろには一部地域で散見され、弥生時代後期にはほぼ全域に展開するとされる（合田 1988）。また古墳時代になると東北地方でも確認される。筆者は現在、こうした構造の炉が東北地方に波及する過程の検討を行っているのだが（神林 2019・2023）、その作業の中で、一部地域において炉石を模したとみられる土製品を設置する炉が存在すること知った。この土製品については、報告書における事実記載にとどまり、基礎的な研究は行われていない。また、栃木県内でもこうした土製品とみられる遺物が出土しているが、ほとんど注目されていない。

そこで本論では炉石を模したとみられる土製品（以下炉石状土製品）について、栃木県内の資料を概観するとともに、関東地方における事例を集成し、基礎的な事項に関する検討を行う。そして炉石状土製品の特徴や、栃木県において存在する背景について考えてみたい。

1. 栃木県内の炉石状土製品

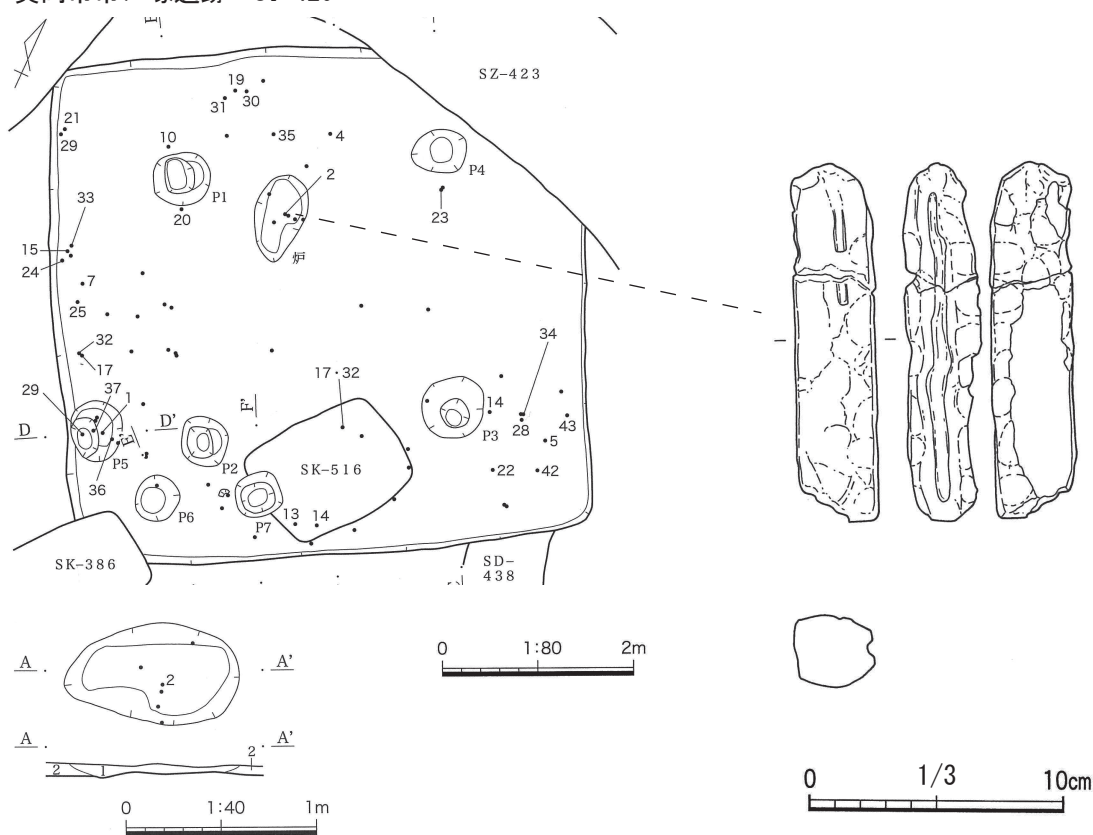
（1）真岡市市ノ塚遺跡（第1図）

遺跡の概要 栃木県の南東部に位置する真岡市に所在する。市内を南北に流れる小貝川左岸の台地上に立地している。経営体基盤整備事業に伴う発掘調査で、古墳時代前期から中期前半にかけての堅穴建物跡が100軒近く確認されており、大規模な集落跡であることが判明した。また玉造りの工房跡や小型の青銅鏡などが確認されており、有力者層を伴う地域の拠点的な集落である可能性が考えられる。

① 1区 SI-420

遺構の概要 5.5×5.3mの隅丸長方形の堅穴建物跡である。堅穴内には4本の支柱穴のほか、複数の小穴が確認されている。本遺構からは粗割の石材や管玉・石製模造品の未製品、砥石などが出土しており、玉造り

真岡市市ノ塚遺跡 SI-420



第1図 栃木県の事例(1)

の工房跡と考えられている。炉跡は主柱穴間に位置しており、長軸 0.9m、短軸 0.5m の楕円形である。深さ 7cm ほどの深さに掘り窪められており、底面は良く焼けている。

炉石状土製品の特徴 1点出土しており、報告書では棒状土製品として報告されている。出土状態についての記載や写真はみられないが、出土位置が平面図に示されており、炉の中央付近から出土したことが分かる。片方の端部を欠損しているが、全体の形状は長細い棒状で、断面形は方形となっている。大きさは遺存長 14.3 cm、幅 3.3 cm、厚さ 2.9 cm、重量 153 g である。胎土には砂粒や小礫が含まれている。色調は橙色を呈しているが、片面(掲載図の正面)にはススらしき炭化物が薄く付着しており、やや黒ずんでいる。反対側の面にはこうした黒ずみは認められないことから、おそらくこの面を上または火床側に向けて設置していたものと思われる。表面には指頭圧痕が多数認められ、側面には指頭圧痕を撫で消そうとした痕跡が認められた。おそらく粘土塊を手づくねによって棒状に成形し、指で撫でる程度の調整を施したものと思われる。

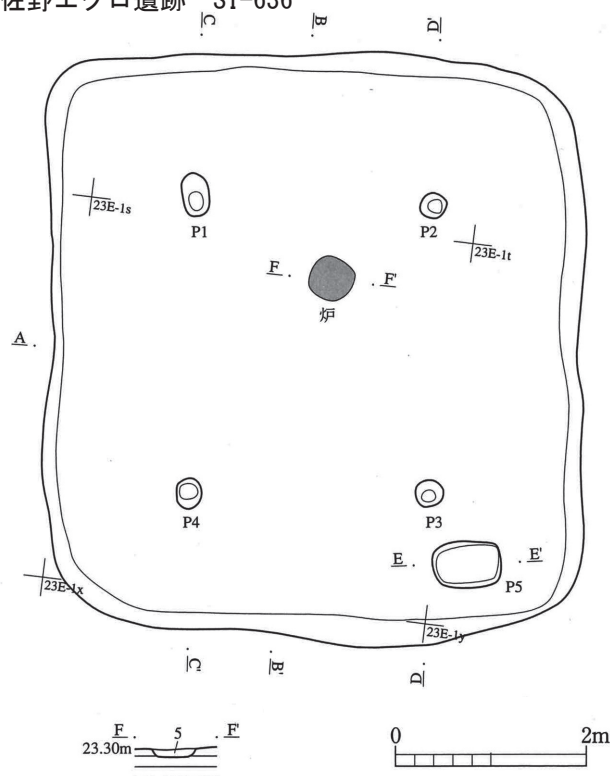
(2) 佐野市エグロ遺跡(第2図)

遺跡の概要 栃木県南西部に位置する佐野市に所在する。市域を南北に流れる三杉川沿いの低地に面した台地上に立地している。佐野新都市開発整備事業に伴う発掘調査の結果、古墳時代前期の竪穴建物跡が 40 軒以上確認され大規模な集落跡であることが判明した。この遺跡の北側には多数の竪穴建物跡や前方後墳が確認された松山遺跡が所在している。

①第 636 号住居跡

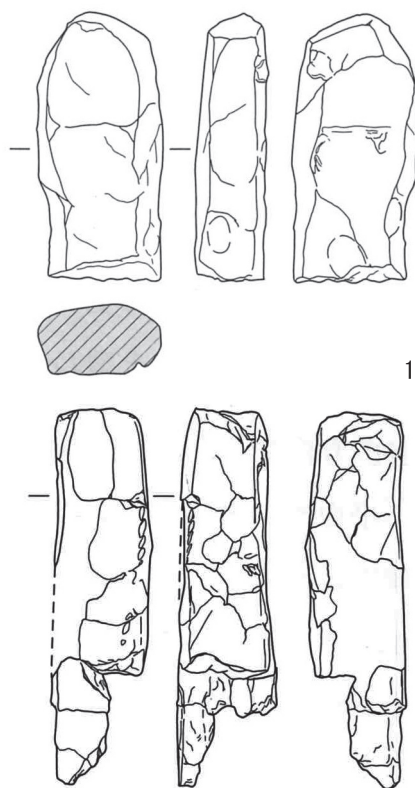
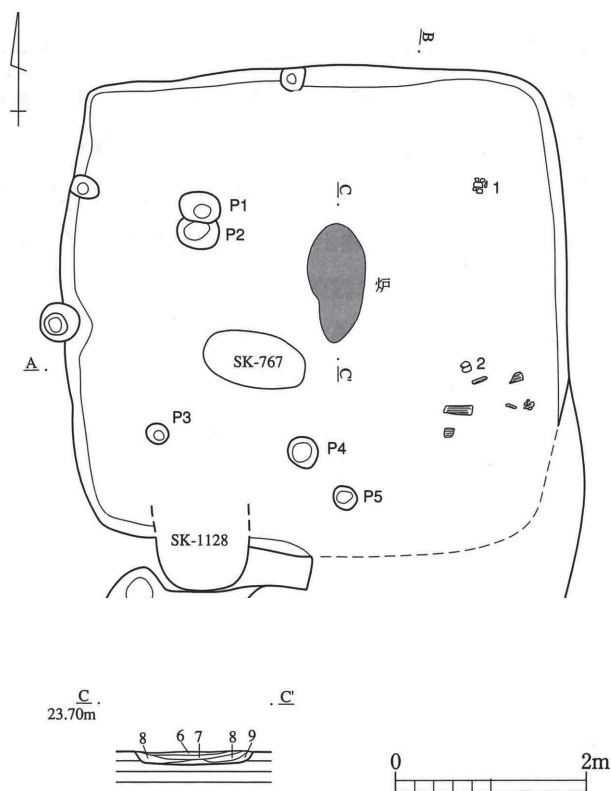
遺構の概要 6.2 × 5.6 m の隅丸長方形の竪穴建物跡である。竪穴内には 4 本の主柱穴と貯蔵穴が確認されて

佐野エグロ遺跡 SI-636



0 1/3 10cm

佐野エグロ遺跡 SI-739



0 1/3 10cm

第2図 栃木県の事例(2)

いる。炉跡は竪穴中央からわずかに北側に寄った位置に存在する。規模は直径48 cmで、浅い皿状の掘り込みが認められている。掘り込み内部には焼土を主体とした橙褐色土が堆積しており、掘り込み底面および周辺の床面が焼土化している。

炉石状土製品の特徴 1点出土しており、報告書では棒状の土製品として報告されている。出土状態に関する図や写真は掲載されていないが、本文中の記載によると炉内から出土しており、炉との関連が伺える遺物とされている。片側を欠損しているが、平面形は長細く、断面形は長方形で、全体としては長細く扁平な棒状となっている。大きさは遺存長17.3 cm以上、幅4.9 cm、厚さ2.5 cm、重量280 gである。胎土は少量の砂粒を含んでおり、また表面に植物繊維とみられる痕跡が認められることから、繊維を含有していたものとみられる。色調はにぶい橙色を呈している。なおススなどの炭化物の付着は認められない。

②第739号住居跡

遺構の概要 4.9 × 4.7 mの正方形の竪穴建物跡である。ほぼ全面に地山由来のロームブロックを含む貼床が施されている。竪穴内には柱穴とみられるいくつかの小穴が存在するが、どれが主柱穴かは判然としない。貯蔵穴も認められていない。炉跡は竪穴中央に位置しており、長軸120 cm、短軸60 cmの規模である。深さ12 cmほどの浅い掘り込みを有し、内部には焼土を主体とした土が堆積し、底面および周辺は焼土化している。

炉石状土製品の特徴 2点出土しており、いずれも報告書では土製品として報告されている。出土状態に関する図や写真は掲載されていないが、本文中の記載によると2点とも炉に近接して出土したとされている。1は片側の端部を欠損しているが、端部形状は丸みを帯びている。断面形は丸みを帯びた長方形で、全体としては長細く扁平な棒状の形態となっている。大きさは遺存長10.6 cm以上、幅5 cm、厚さ2.8 cmである。胎土はわずかに砂粒を含んでおり、色調は橙色を呈している。2も片側の端部を欠損しているが、端部形状は1と異なり直線的となっている。断面形は正方形で、長細い角柱状の形態となっている。大きさは遺存長10.5 cm以上、幅3.5 cm、厚さ3.5 cm、胎土はわずかに砂粒を含んでおり、色調は橙色を呈している。ススなどの炭化物は認められないが、割れ方をみると熱によって爆ぜたような状況を示している。

2. 関東地方の炉石状土製品

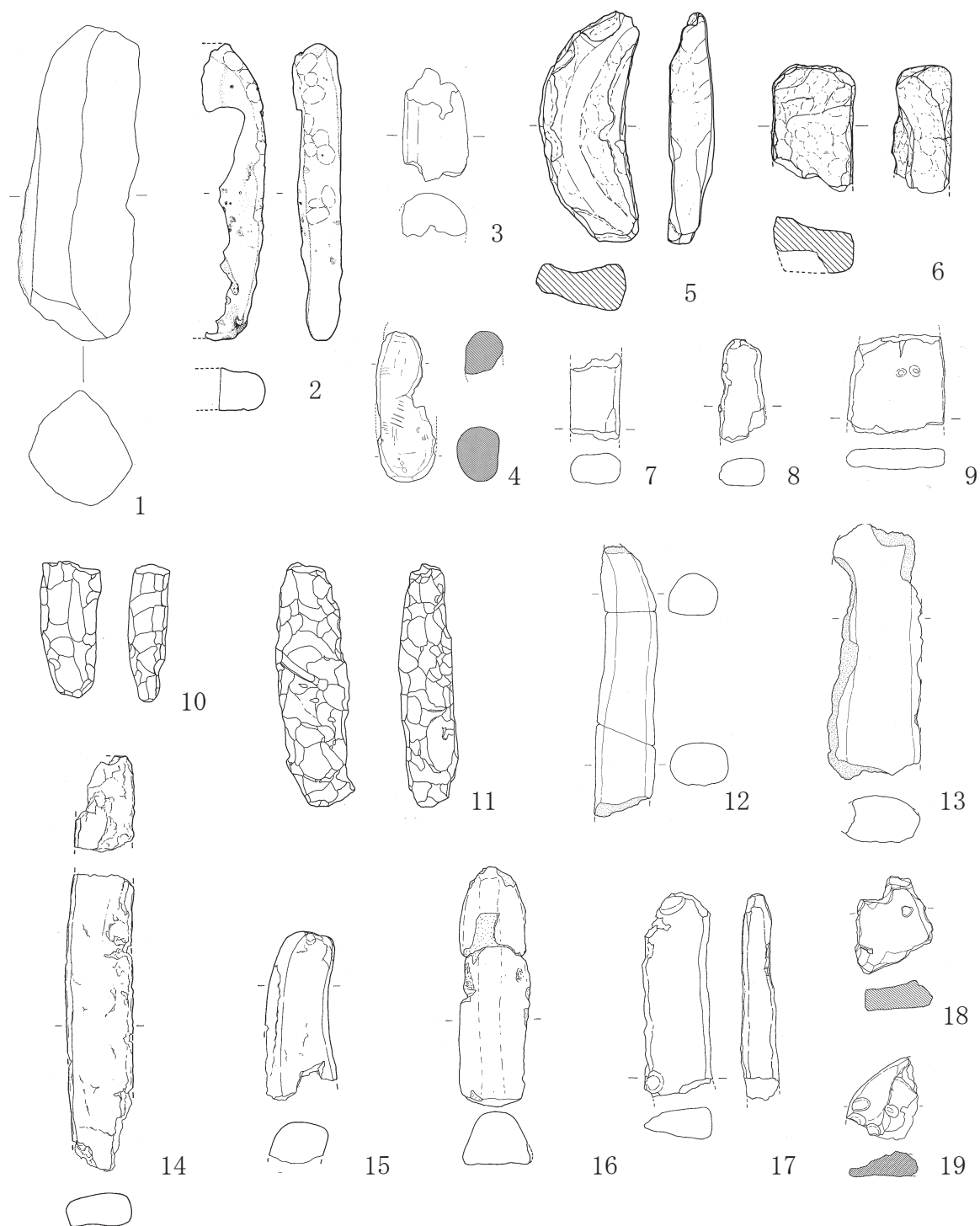
(1) 千葉県域 (第3図)

全体で7遺跡19点の事例を確認した。時期は弥生時代中期と古墳時代前期の2時期で、弥生時代後期の事例は確認できていない。なお本地域は炉石状土製品が最初に確認された地域とみられる。最初に報告された千葉市城の腰遺跡の報告書(千葉県文化財センター1979)では、「(前略)その出土状態より考え、炉内における枕具に供されたと思われる。」と記載されている。一方でその形状から煮沸器を持ち上げる「支脚」「支脚状土製品」として報告している例もいくつか確認できる。また草刈遺跡I区の報告書(千葉県教育振興財団2011)では「土製炉囲い」という名称で報告されており、詳細な説明は無いものの、「支脚」とは異なる機能と認識した名称もみられる。

弥生時代中期 第3図1～9はいずれも中期後半にあたる宮ノ台式期の事例である。遺跡別の出土数では市原市草刈遺跡で3点、千葉市城の腰遺跡と木更津市美生遺跡群でそれぞれ2点、佐倉市大崎台遺跡と市原市大厩遺跡でそれぞれ1点出土している。調査面積や竪穴建物跡の数を考慮しても、遺跡によって大きな偏りは認められない。

確認された炉石状土製品はほとんどが欠損品であり、全形が判明するのはわずかである。

1の大崎台遺跡の事例は全長29.6 cm、幅9.5 cm、厚さ10.8 cmで円柱または角柱状となっており、報告書



- | | | |
|-------------------|---------------------|--------------------|
| 1. 大崎台遺跡 121 号住 | 2. 美生遺跡群Ⅱ 7 号住 | 3. 美生遺跡群Ⅰ 199 号住 |
| 4. 大厩遺跡 38 号住 | 5・6. 城の腰遺跡 87 号住 | 7・8. 草刈遺跡Ⅰ区 136 号住 |
| 9. 草刈遺跡Ⅰ区 40 号住 | 10・11. 戸張作遺跡 144 号住 | 12. 草刈遺跡Ⅰ区 1 号住 |
| 13. 草刈遺跡Ⅰ区 70 号住 | 14・15. 草刈遺跡Ⅰ区 70 号住 | 16. 草刈遺跡Ⅰ区 489 号住 |
| 17. 草刈遺跡Ⅰ区 110 号住 | 18. 下鈴野遺跡 21 号住 | 19. 山田橋大山台遺跡 97 号住 |

(縮尺 1/6)

第3図 炉石状土製品集成 (千葉県)

では「支脚状土製品」と記されている。炉の縁から出土しており、隣接する土器片とともに埋設された状態で設置されていた。なお欠損品である3の美生遺跡の事例もこれに近い形状とみられる。

2の美生遺跡の事例は全長28cm、遺存幅6cm、厚さ3.9cmで、炉中央に埋設されていた。大崎台遺跡の事例と近い長さであるが、厚さが4cmと薄く、扁平な棒状となっている。欠損品である4の大厩遺跡の事例や、7～9の草刈遺跡の事例はこれに近似した形態とみられる。

5・6の城の腰遺跡の事例は炉縁付近から2点並んで出土している。このうち全形が判明する5は、長さが22cmほどと短く、平面形は三日月状をしている。一方の6は欠損品であるが、平面形・断面形から角柱状を呈するものとみられ、形状の異なるものを2点並べて設置したものとみられる。

古墳時代前期 第3図10～19が該当する。遺跡別の出土数では市原市草刈遺跡が6点、千葉市戸張作遺跡が2点、市原市下鈴野遺跡と山田橋大山台遺跡がそれぞれ1点となっている。ほとんどが市原周辺の遺跡、特に草刈遺跡から出土している点は特徴的である。同じ市原市域における大規模遺跡群である上総国分寺台遺跡群（中台遺跡・南中台遺跡など）では確認されていない。地域の特徴というよりは、特定の遺跡に集中する傾向と捉えられる。ただし草刈遺跡についても調査された竪穴建物跡の軒数に比べれば出土数はごくわずかである。弥生時代の事例と同様に欠損品がほとんどだが、比較的全形を窺える資料が多い。

10・11は戸張作遺跡の事例で炉の中央から2点並んで出土している。完形とみられる11は長さ16.2cm、幅5cm、厚さ3.2cmで、全面に指頭圧痕がみとめられることから、手づくね成形されたとみられる。欠損している10も遺存している部分の特徴は11とほぼ同一であることから、同形同大のものを2点並べて設置したとみられる。

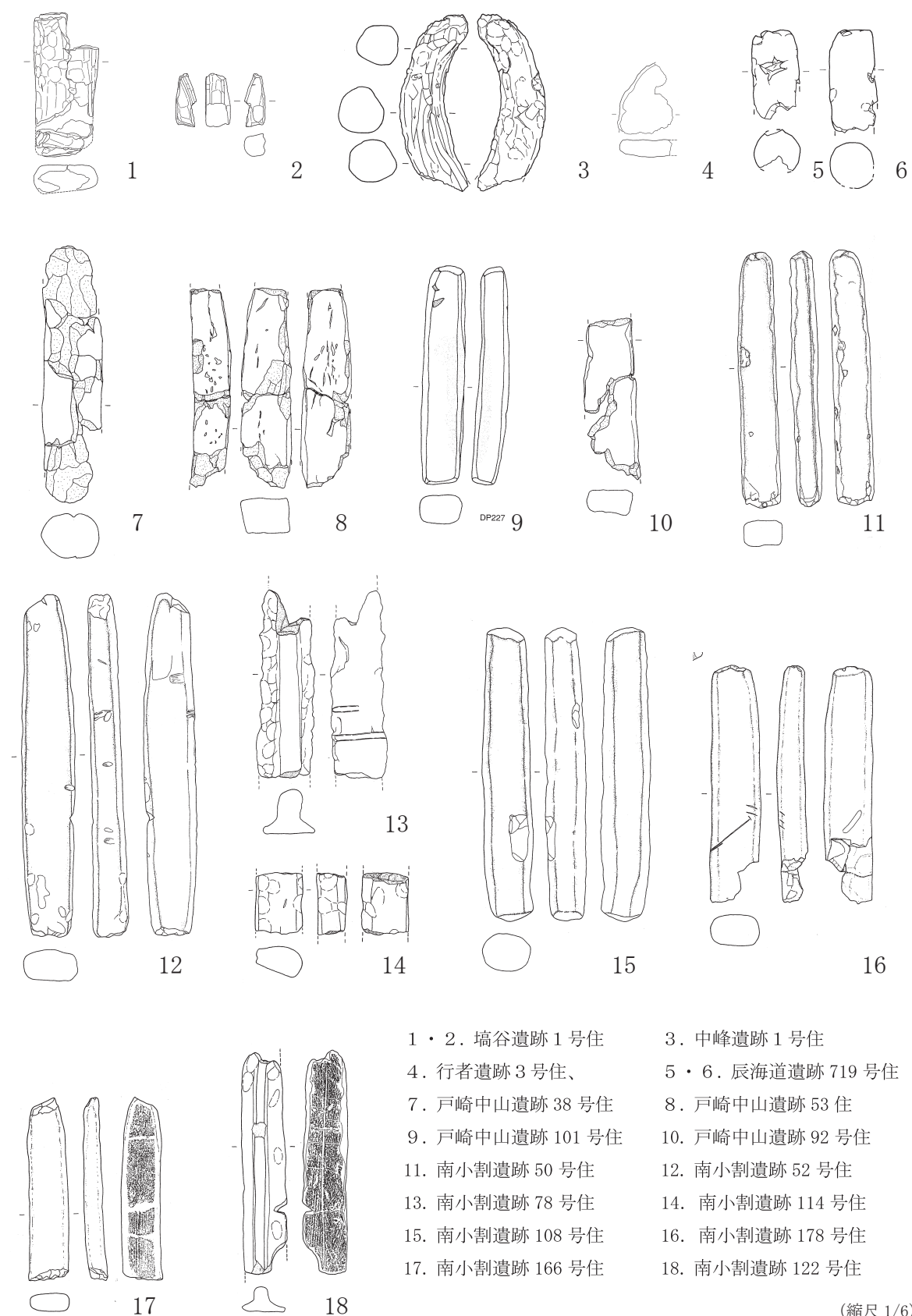
12～17は草刈遺跡の事例である。ほとんどの資料が幅5～6cm、厚さ3～4cmほど、長さはK区70号住で約39cmと扁平で長細い棒状の形態となっている。ただしK区489号住の事例は長さ22.6cm、幅6.4cm、厚さ5cmで、三角柱状を呈している。出土状態が不明な資料がほとんどだが、出土位置が明示されているものについては炉の縁や中央から出土し、炉の長軸方向に直交するように設置されている。なおA区1号住(12)やK区489号住(16)では炉石状土製品とともに、炉の中央付近からいわゆる「烏帽子型土製支脚」が出土している。炉石状土製品と支脚類の機能を考える上で示唆的な事例である。

18・19はともに市原市に所在する下鈴野遺跡・山田橋大山台遺跡の事例である。小片であるが、厚さ2～3cmと扁平な形状をしており、前述した事例と同様の形状となるとみられる。

(2) 茨城県域 (第4図)

全体で6遺跡23点が確認されており、今回集成したなかでは最も事例が多い地域である。時期についてはいずれも古墳時代前期のものである。名称については、茨城県ではじめて確認された南小割遺跡の報告書（茨城県教育財団1998）において「土製炉石」という名称が付けられており、その後の報告書でも「炉石形土製品」や「炉粘土板」といった炉に関連する土製品という認識の呼称が多くみられる。遺跡別の出土数では茨城県町南小割遺跡で12点、かすみがうら市戸崎中山遺跡で6点、つくば市辰海道遺跡で3点、稲敷市中峰遺跡、笠間市行者遺跡・埜谷遺跡でそれぞれ1点ずつとなっており、千葉県域と同様に特定の遺跡に集中する傾向が窺える。

1・2は埜谷遺跡の事例である。炉の中央から2点並んで出土している。遺存状況の良い1は残存長14.7cm、幅6.6cm、厚さ2cmと扁平な棒状の形態となる。外面にはナデや指頭圧痕が認められ、割れ方は被熱によって破碎したようにみえる。



第4図 炉石状土製品集成 (茨城県)

3は中峰遺跡の事例である。遺存長 17.9 cm、幅 6.9 cm、厚さ 4.7 cmで、指頭圧痕とナデ調整の痕跡が認められている。断面形は楕円形であるが、平面形は三日月状に湾曲しており、前述した千葉県城の腰遺跡の事例に近似している。また小片だが4の行者遺跡の事例も同様のものとみられる。

5・6は辰海道遺跡の事例で、炉の中央から2点並んで出土している。いずれも欠損品だが、直径5 cmほどの円筒形をしている。

7～10は戸崎中山遺跡の事例で、この他に図示されていないものが2点存在する。形態はいずれも扁平で長細い棒状となっており、7のみ断面形がややつぶれた楕円形となっている。大きさは長さ 22.5～26.2 cm、幅 5.1～6.1 cm、厚さ 2.6～4.6 cmで、形態および大きさが比較的揃っている。出土状態が示されているものでは炉の中央から出土している事例が多い。

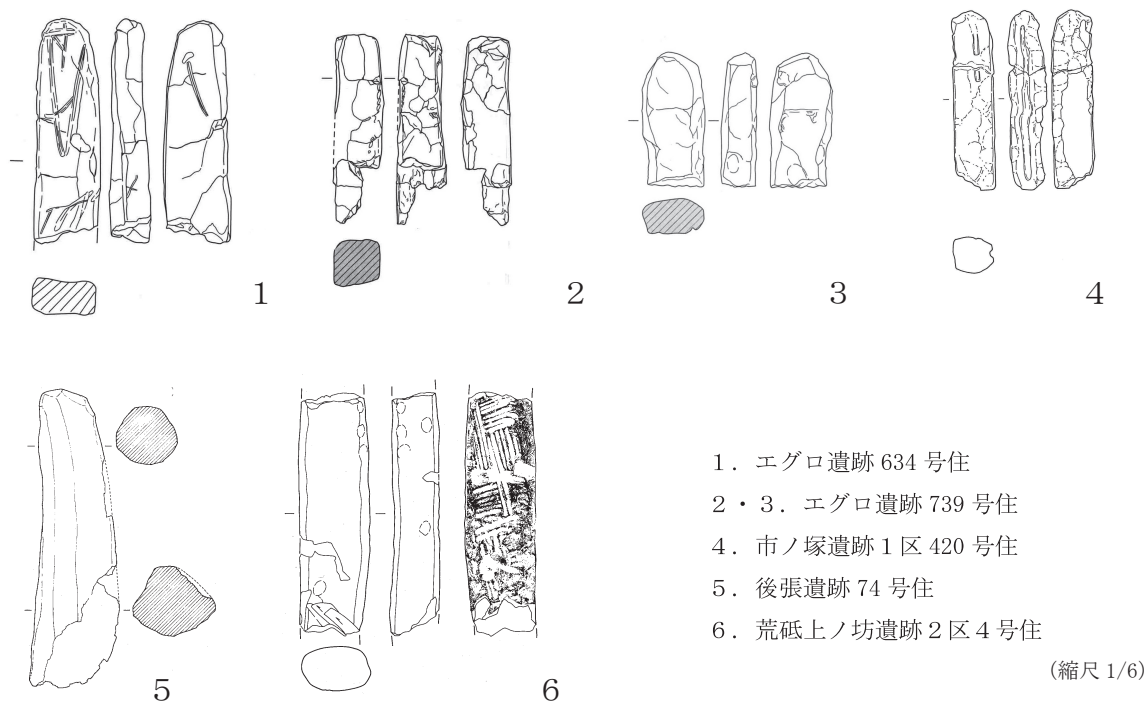
11～18は南小割遺跡の事例で、この他に図示されていないものが4点存在する。形態は扁平で長細い棒状のものがほとんどであり、長さは完形品で 25.7～34.5 cm、幅は 3.8～5.9 cm、厚さは 1.8～4.5 cmとなっている。また図 13・18のように、断面形が逆T字状となる本遺跡でしかみられない形態のものも存在するが、全体として形態・大きさは揃っている。出土状態が示されているものでは、炉の縁または中央の2つが存在し、それぞれほぼ同数認められた。また143号住では炉石状土製品(図示されていない)のほかに粗製器台(炉器台)が炉内から出土しており、炉石状土製品と器台類の機能を考える上で示唆的である。

(3) 栃木・埼玉・群馬県域 (第5図)

いずれの県も事例が少ないため一括した。報告書内の名称については、その外見から「棒状土製品」「土製品」などと呼称されている。時期は全て古墳時代前期である。

1～4は前述した栃木県の事例である。市ノ塚遺跡で1点、エグロ遺跡で3点確認されている。

5は埼玉県北部に位置する本庄市後張遺跡の事例である。片側の端部を欠損しているが平面形はやや湾曲



第5図 炉石状土製品集成 (栃木県・埼玉県・群馬県)

し、断面形はややつぶれた楕円形となり、前述した茨城県中峰遺跡（第4図-3）の事例に近似している。出土位置は地床炉に近接した位置で、炉石とみられる自然石と並べられたような状態で出土している。

6は群馬県南部に位置する前橋市荒砥上ノ坊遺跡の事例である。両端を欠損しているが、遺存長 19.2 cm、幅 5.6 cm、厚さ 3.4 cmで、長細く扁平な棒状の形態になるものとみられる。炉に近接した位置から出土している。

3. 炉石状土製品の特徴と機能

（1）形態的特徴（第6図）

炉石状土製品の平面形は細長く棒状となるものが多く、稀に三日月状に湾曲するものが認められる（第3図1-5・15、第4図-3、第5図-5など）。断面形状は長方形で扁平となるものが主体であるが、ほかに方形や円形や三角形を基調とし、やや厚みがあり柱状となるものも認められる（第3図-1・16、第4図-5・6・7、第5図-2・5）。また茨城県南小割遺跡では逆T字状のものが認められている（第4図-13・18）。

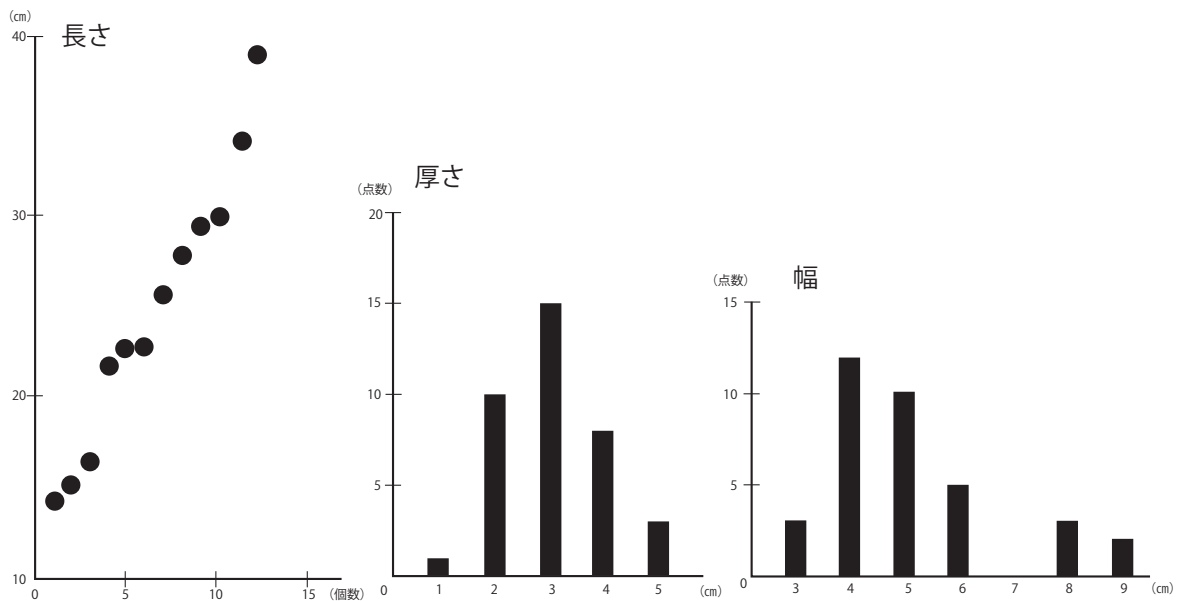
器面にみられる成形・調整の痕跡としては指頭圧痕やナデが多い。輪積み痕などの接合痕は認められないことから、粘土塊を手づくねによって棒状に成形し、その後に表面を撫でて形を整える程度の製作方法とみられる。なお一部で胎土に植物繊維痕がみられることから、繊維が混ぜ込まれる場合もあったのだろう。

大きさについては完形品が少ないため、計測できる部位と資料数にばらつきがある。長さは最小 14.2 cm、最大 39.2 cmと大きな開きがあるが、20～30 cm前後のものが多い。幅は最小が 3 cm、最大が 9.5 cmで、4～5 cmのものが一般的であり、厚さは最小が 1.8 cm、最大が 10.8 cmで、およそ 3 cm前後の大きさに集中しており、扁平な形状となる個体が主体である。

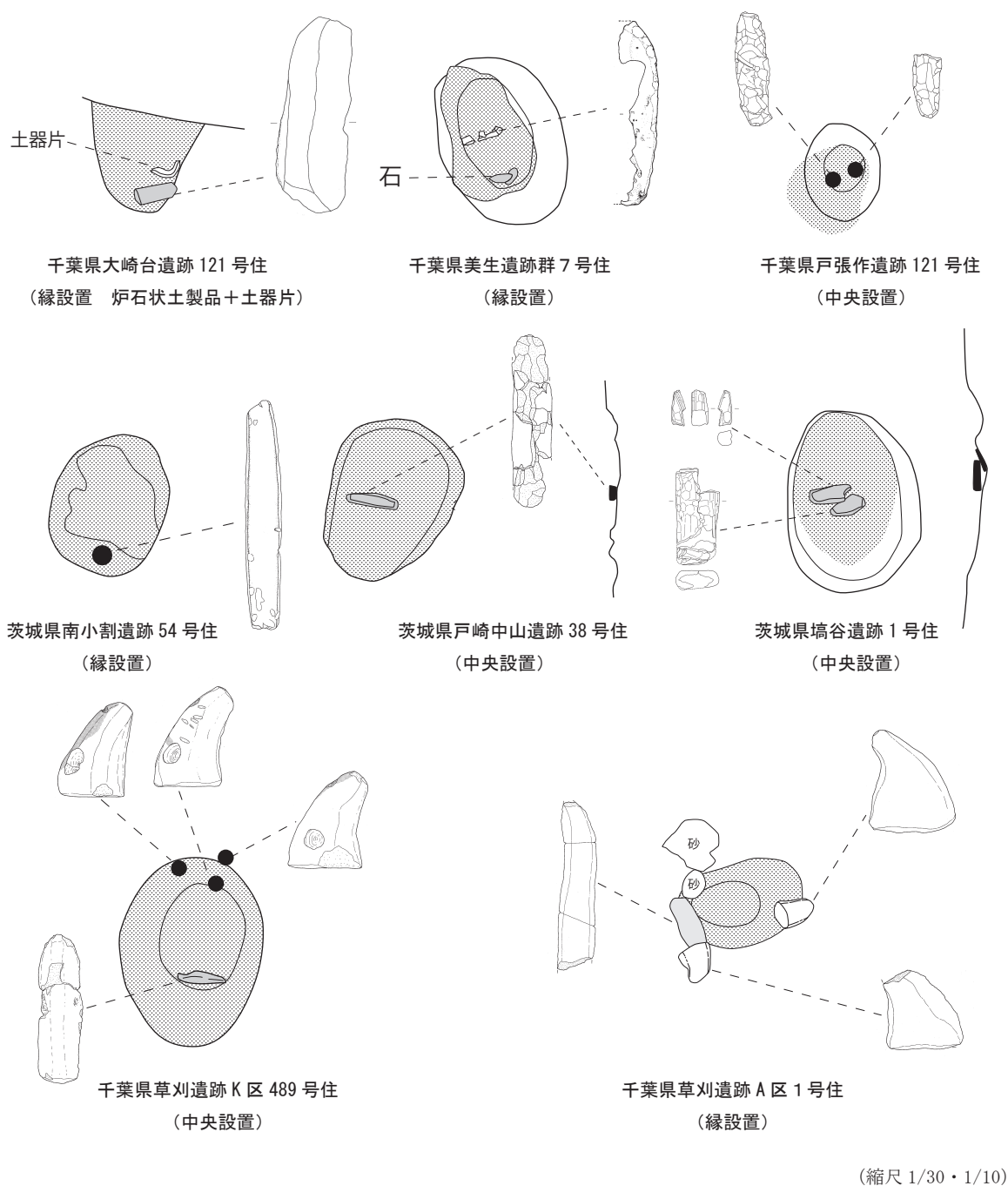
（2）出土状況と設置方法（第7図）

炉または炉周辺における出土位置については、炉の中央に位置する場合と、掘方または火床面の周縁部に位置する場合の2つに分けられるが、中央付近から出土するものが多い。設置方向については、炉の掘方または焼土化範囲の長軸方向に直交するように設置されている。

設置される個数について、大半は1点であるが、千葉県城の腰遺跡、戸張作遺跡、草刈遺跡 K-70 号住、茨



第6図 炉石状土製品の法量



第7図 炉石状土製品の出土状況

城塙谷遺跡、栃木県エグロ遺跡 SI-739 では1つの炉から2点出土しており、出土状況が判明する事例では2点を並べ置いたような状況が確認できる。設置方法については個数による差異は認められない。

(3) 炉石との共通点とその機能 (第8図)

炉石状土製品の形態的特徴や出土状況をまとめたが、まず形態的特徴については一定の共通点やまとまりがあるものの、一方でばらつきも大きい。これはおそらく「細長い棒状の形態」という緩やかな共通認識のもとに製作されたものであり、厳密な規範や作り方の流儀があるようなものではなかったであろう。あくまで自然石である炉石の代用品として、近似した形態を備えていれば十分であったと考えられる。また出土状況から考えられる設置方法についても、石添炉における炉石と共通する傾向(鶴見 1996、神林 2019)が確



(縮尺 1/30・1/10)

第8図 石添炉と炉石の様相

認められた。これらの事から、炉石状土製品の機能は石添炉における炉石と同一であったと考えられる。

ただし肝心の炉石の機能自体が現時点で明確になっているとは言い難い。炉石の機能としては防風設備（杉原 1954）、串焼き調理設備（杉原 1954）、支脚（中村 1990）、燃焼材の空気調整（鶴見 1996）、火力調整（岩瀬 1997、鈴木 2015）などの説が出されており、おおむね煮炊き時の火力や燃焼効率の向上に関する機能が想定されている。炉石状土製品の機能を考える上で示唆的なのは、炉石状土製品とともに土製支脚が出土した千葉県草刈遺跡A区1号住・K区489号住や、炉器台とともに出土した茨城県南小割遺跡143号住の事例である。土製支脚や炉器台は炉内に設置され、煮沸器である甕を持ち上げることで熱効率を上昇させ、煮炊き効率を良くするためのものと推定されている（小林 1974）。

このような事例から、少なくとも炉石状土製品は支脚や器台とは異なる機能のものと認識されていたことが窺える。そして支脚や器台が煮沸器本体を持ち上げる機能を有していたと考えれば、炉石状土製品は薪などの燃焼材に関する機能を有していた可能性が高いと考えられる。

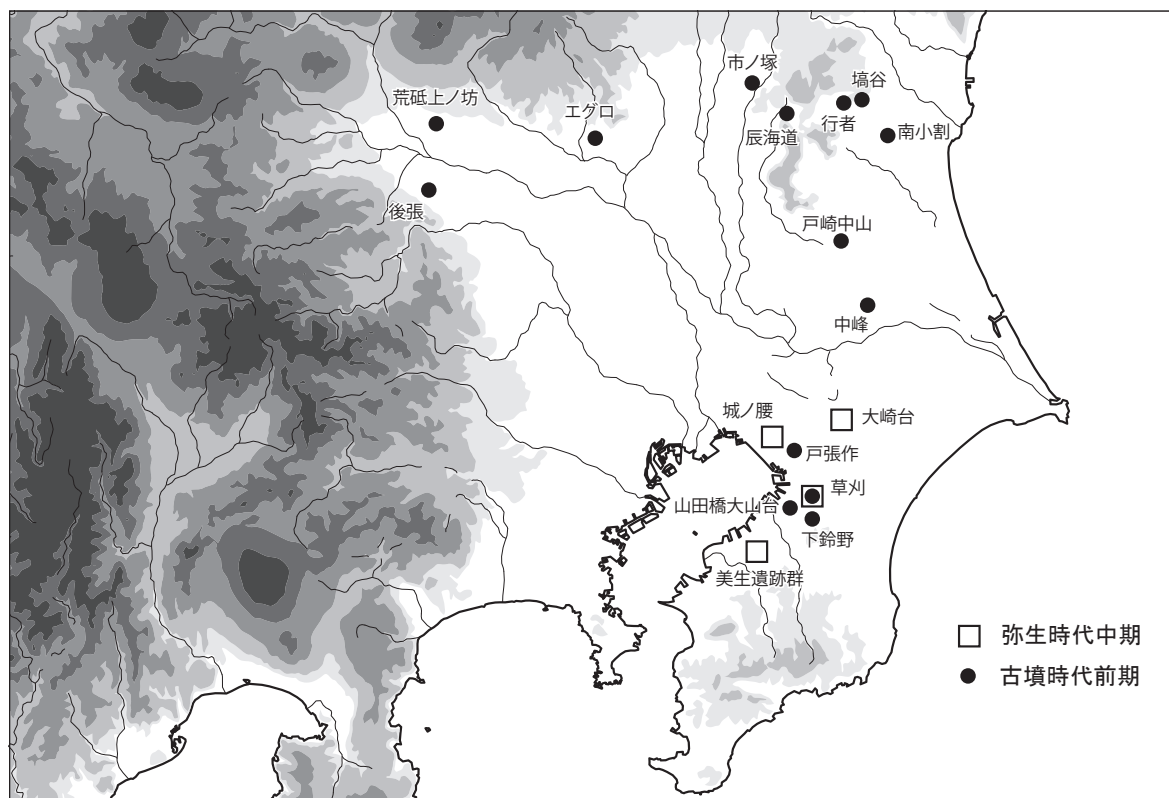
4. 炉石状土製品の出現と拡散（第8・9図）

（1）炉石状土製品の出現について

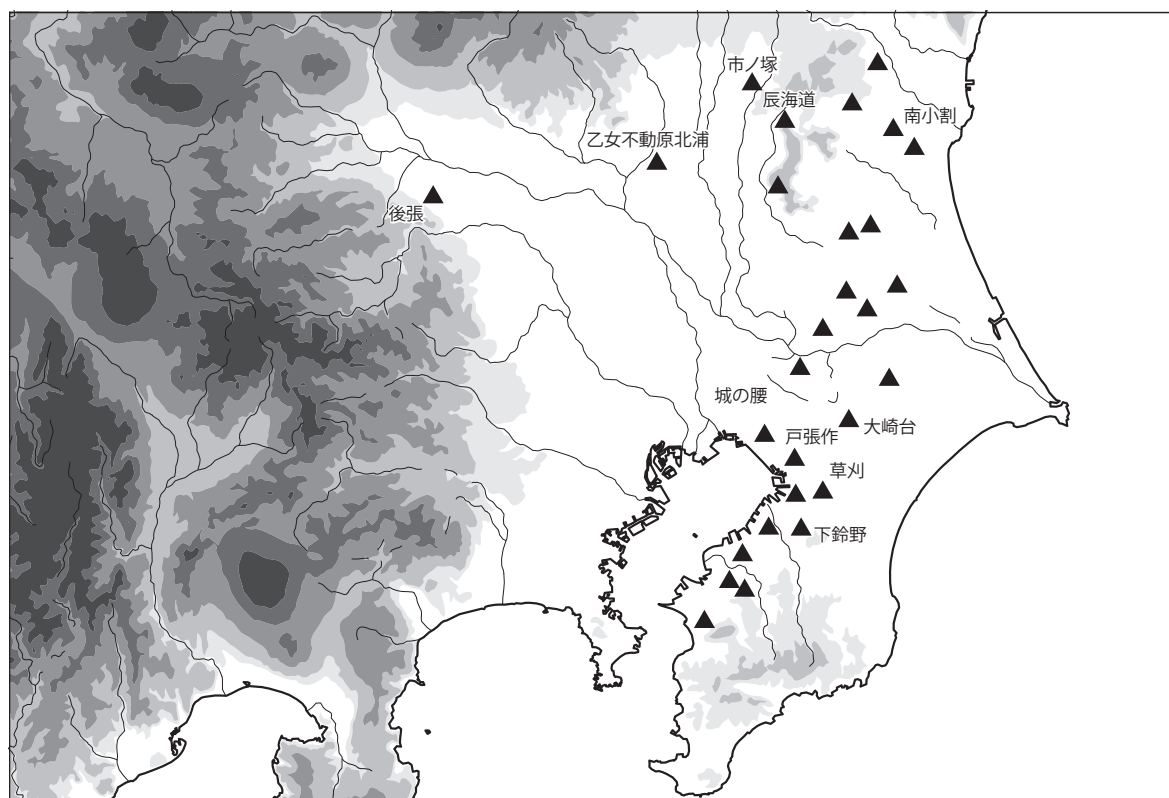
炉石状土製品は弥生時代中期と古墳時代前期の2時期で確認された。このうち弥生時代中期の事例は、現在の千葉県域にあたる房総地域の宮ノ台式期の遺跡でのみ確認されていることから、この地域において炉石状土製品が出現した可能性が高い。ただし、前述の通り炉石状土製品は石添炉の炉石を模してつくられ、同様の機能を有しているのだが、房総地域では安房地域の一部遺跡を除いて基本的に石添炉が認められていない。宮ノ台式期の炉の様相を検討した飯塚氏によれば、東京湾の西岸では石添炉、東岸では土器片を炉石のように設置する土器片添炉や単純な地床炉が多いという地域差が認められるという（飯塚 2005）。また、こうした傾向は弥生時代後期～古墳時代前期でも同様であるという（合田 1998）。おそらくこのような地域においてわざわざ炉石状土製品を作り使用した背景には、房総地域以外の地域や集団の影響があった可能性が考えられる。

（2）北関東地域への拡散とその背景

弥生時代に房総地域で出現した炉石状土製品は、古墳時代前期になると北関東地域に拡散することが判明した。この時期の北関東地域では、南関東系の土器群が急速に広がり定着することが指摘されている（比田井 1995・西川 1995 など）。例えば茨城県域で最も多く炉石状土製品が出土した南小割遺跡では、交互押捺



第9図 炉石状土製品の分布



第10図 土製支脚の分布

による小波状口縁を有するナデ調整平底甕が大量に出土している。これらの土器は弥生時代の房総地域に出自を持つことが指摘されており（比田井 2012）、この地域の影響を強く受けた集落跡と考えられている。そうした遺跡で炉石状土製品が大量に出土するという事実は、この種の土製品の広がり背景を考える上で示唆的である。

また「烏帽子型土製支脚」などと呼称される土製支脚の広がりも、炉石状土製品と近似した様相を示している（図 10）。この土製支脚は弥生時代の西日本において出現したとみられ（小林 1941）、3～4 世紀ごろの近畿地方を中心に分布が認められる（大橋 1978、田中 2013）。関東地方では古墳時代前期以降に分布が認められる。特に房総・常陸地域や、さらに東北地方の太平洋沿岸域から日本海側の山形盆地において比較的多く分布が認められる（神林 2023）。なかでも千葉県市原地域に集中する傾向が指摘されており（村山 2011）、筆者は房総地域を起点として関東・東北の各地に広がった可能性を考えている。

このように古墳時代前期には房総地域に由来する様々な事象が、北関東各地に影響を及ぼしており、炉石状土製品の広がりもこれらと同一の現象と捉えられる。こうした現象の背景には、房総地域からの人や情報の広がり反映しているものと考えられる。それとともに、他地域においてもわざわざ炉石を模した土製品を製作して使用した背景には、自身の出自やそれに伴う生活様式に対するこだわりのようなものがあつたものと推察される。

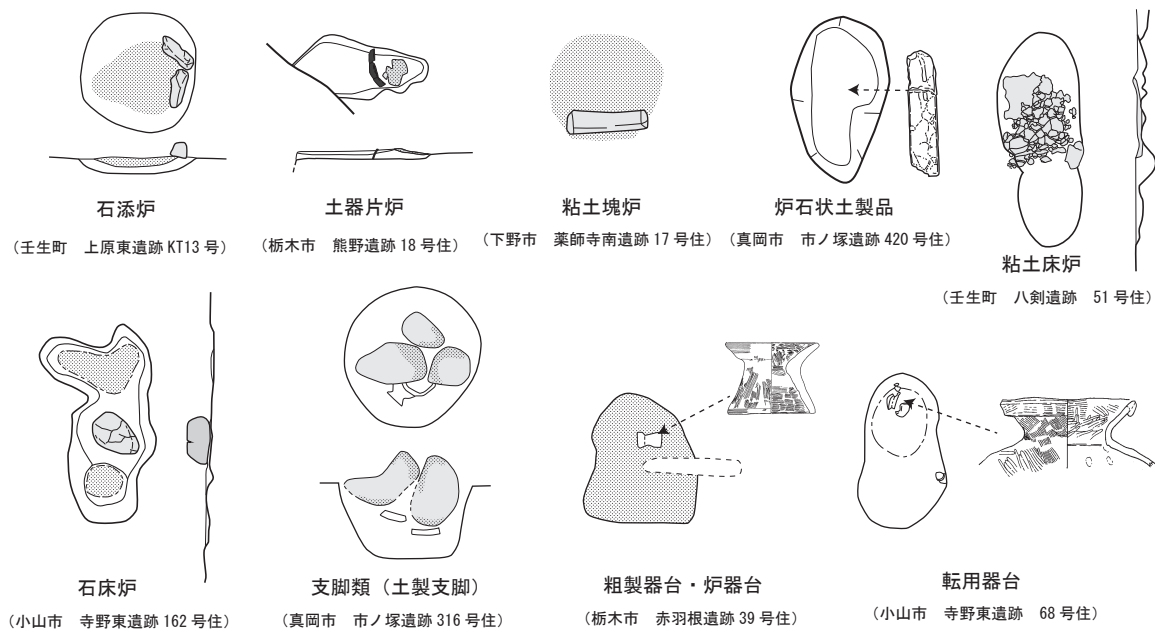
5. 栃木県内における炉石状土製品分布の背景

最後に、栃木県の遺跡で炉石状土製品が確認された意味について考えてみたい。

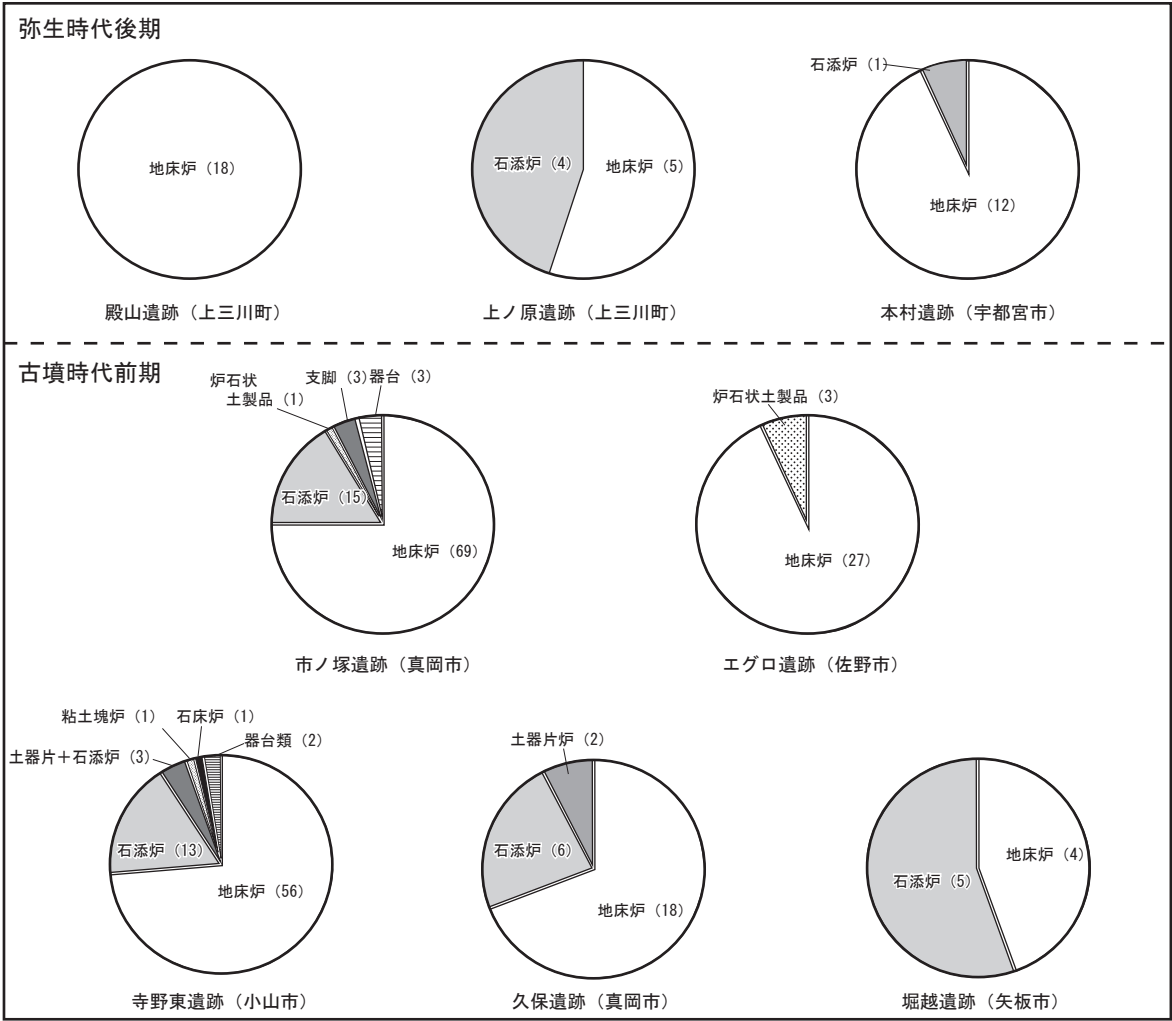
栃木県における炉の様相 第 11・12 図には栃木県内の弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡で確認された炉の種類の一覧と、比較的多くの堅穴が調査された遺跡における、炉の構成比率を示した。概観すると弥生時代後期は基本的には地床炉を主体とし、一部の遺跡でごくわずかに石添炉が認められる程度である。ところが古墳時代前期になると炉の様相が多様化する。これらの炉はいずれも弥生時代の南関東地域で認められる構造（合田 1998）であることから、これらの地域の影響によるものと考えられる。炉の構成比率では地床炉を主体とし、石添炉が一定の割合で存在するあり方が県内全域で比較的共通している。一方でその他の炉については遺跡ごとの様相差が認められる。

寺野東遺跡 例えば県内でも屈指の大規模集落遺跡である寺野東遺跡では、東京都の多摩地域でみられる石床炉（神林 2019、及川 2020）が確認されている。また炉石と土器片を組み合わせる炉や、壺の口縁部を器台に転用した炉も、相模・南武蔵地域などで散見される。このように寺野東遺跡の炉の様相は、南関東地方のなかでも、東京湾西岸域の遺跡の様相に近いといえる。

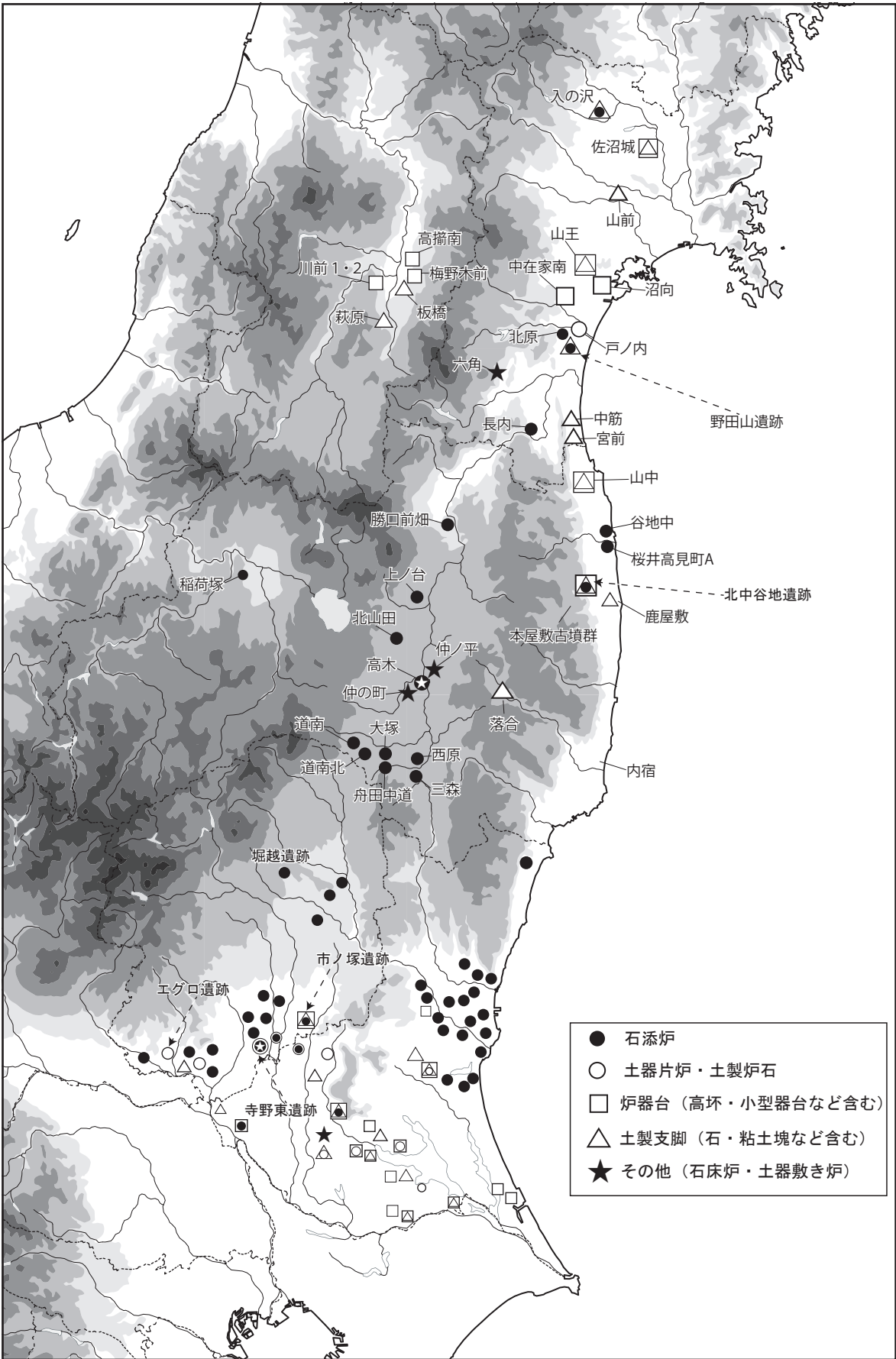
市ノ塚遺跡 では炉石状土製品が確認された遺跡ではどうだろうか。まず市ノ塚遺跡で確認された炉のうち、地床炉以外の内訳をみると、石添炉が 14 軒、炉石状土製品 1 軒、石添炉＋支脚類 1 軒、地床炉＋支脚類 2 軒、地床炉＋転用・粗製器台 1 軒という構成となっている。このうち土製支脚・器台類については、いずれも房総地域に出自を持つ要素であり、古墳時代前期になると本遺跡に隣接する茨城県の中～南部域を中心に分布が認められる（鶴見 1994）。一方で本遺跡を含む栃木県域では石添炉が多く、炉に伴う土製支脚や器台類はあまり多くない。市ノ塚遺跡のように両者が 1 つの遺跡において併存するあり方は非常に珍しい（神林 2023）。本遺跡の立地や性格を考慮すれば、地域の拠点集落として活発な人や情報の行き来のなかで、隣接地域に広がる房総地域由来の炉の構造がもたらされたものと考えられる。炉石状土製品の存在もこうした交流の一端を示しているものと考えられる。



第 11 図 栃木県内における炉の種類



第 12 図 炉の構成比率



第 13 図 東北・北関東地方の炉の地域性（神林 2023 を一部改変し作成）

エグロ遺跡 次に3点の炉石状土製品が確認されたエグロ遺跡はどうだろうか。本遺跡では40軒以上の竪穴建物跡が調査されているにも関わらず、炉石状土製品が出土した竪穴以外はすべて単純な地床炉である。本遺跡に隣接する松山遺跡でも地床炉以外の炉は確認されていない。県内の大規模集落では一定数の割合で石添炉が存在していることを踏まえれば、かなり特異な様相といえる。炉石状土製品が認められている点と、石添炉が存在しないということに注目すれば、房総地域の遺跡の様相に近いようにみえる。この地域の土器編年の検討を行った柏瀬拓己氏は、エグロ遺跡出土土器の中に、下総地域の在地の弥生土器の系譜を引く甕が存在することを指摘している。そして平底甕・台付甕の比率なども含めて、本地域の古墳時代社会の成立の背景に、下総地域を故地とする集団の移住を想定している（柏瀬2020）。このように本遺跡は前述した市ノ塚遺跡とはやや異なり、房総地域に由来する集団の直接的に移住によって、彼の地の生活様式（炉の構造）がもたらされた可能性が高い。

炉石状土製品と炉の多様性 以上のように、炉石状土製品が確認された2遺跡は、炉や土器の様相から房総地域やそれに由来する文化の影響が強い集落跡である可能性が窺えた。ただし、房総地域からの直接的な影響と二次的な影響など、その背景は多様であることが窺えた。また、炉石状土製品に限らず栃木県域の古墳時代前期集落では、遺跡ごとに多様な炉の様相を示すことが判明した。このような炉の様相のからは、この地域の古墳時代集落や社会の成立過程が一様ではなく、さまざまな出自を持つ集団や多様な交流といった複雑な状況のもとに成り立っていた可能性が推測される。

おわりに

今回は炉石状土製品の集成と基礎的検討から、その様相を明らかにするとともに、栃木県域の古墳時代前期集落の炉の様相について言及した。

当該期の炉は、縄文時代のものと比べると構造的特徴に乏しく、調査方法や記録方法、報告書における図示の仕方が統一されているとはいえず、今回の集成にあたっては、報告書に記載される情報量に大きな差がある事を実感した。炉に限らず遺構研究の進展のためには、現場での詳細な観察と的確な記録、そして正確かつ他者に伝わる報告が何より重要である。あたりまえのことではあるが、今後の遺構研究の進展と、現在埋蔵文化財調査の最前線に立つ自身への戒めとして最後に記しておきたい。

なお本稿の執筆にあたり、角田祥一さん、佐藤有紗さんには資料の収集・閲覧に際してお世話になりました。そして、出向中の身分でありながら、研究紀要に執筆する機会を与えて下さったとちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターの皆様に感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 飯塚美保 2005 「宮ノ台期竪穴住居にみられる地域性」『西相模考古』第12号 西相模考古学会
岩瀬彰利 1997 「煮炊き実験 炉形態の違いによる煮炊き効率の差について」『考古学フォーラム』8
大橋信弥 1978 「支脚形土製品の系譜」『古代研究』17 元興寺文化財研究所
及川良彦 2020 「炉を巡る諸問題2 石床炉の研究(3)」『多摩考古』第51号 多摩考古学研究会
柏瀬拓己 2020 「関東平野北部における古墳出現期の地域相」『考古学集刊』第16号 明治大学考古学研究室
神林幸太郎 2019 「古墳時代の東北における炉の様相」『福島考古』第61号 福島県考古学会
神林幸太郎 2023 「古墳時代の東北における炉の様相Ⅱ」『旃檀林の考古学』Ⅱ 大竹憲治氏古希記念論文集刊行会
合田芳正 1988 「炉址小考」『青山考古』第8号 青山考古学会
小林行雄 1941 「土製支脚」『考古学雑誌』第31巻5号

杉原莊介 他 1954『登呂』本編 日本考古学協会

鈴木素行 2015「十王台式土器が焼けてから」『ひたちなか埋文だより』42 ひたちなか市埋蔵文化財センター

田中清美 2013「烏帽子形土製支脚の検討」『私の考古学』丹羽佑一先生退任記念事業会

鶴見貞雄 1994「粗製器台の用途を考える」『研究ノート』第2号 茨城県教育財団

鶴見貞雄 1996「炉石住居覚書」『研究ノート』第5号 茨城県教育財団

栃木県教育委員会 2009『第23回秋季特別展 ムウからみた古墳時代 古墳時代前期・中期を中心として』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

中村倉司 1990「甕形土器から見た弥生社会の地域差」『土曜考古』第15号 土曜考古学会

村山 卓 2010「(7) まとめ」『茨城県稲敷市 浮島前浦遺跡 浮島原古墳群 発掘調査報告書』立正大学博物館

〔分析・図版に使用した報告書〕

栃木県

宇都宮市教育委員会 2004『本村遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第49集

小山市教育委員会 1982『乙女不動原北浦遺跡』小山市文化財調査報告書11集

山武考古学研究所 1996『熊野遺跡』熊野遺跡発掘調査団

栃木県教育委員会 1979『薬師寺南遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第23集

栃木県教育委員会 1984『赤羽根』栃木県埋蔵文化財調査報告書第57集

栃木県教育委員会 1992『久保遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第125集

栃木県教育委員会 1997『寺野東遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第201集

栃木県教育委員会 2001『八剣遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第254集

栃木県教育委員会 2001『エグロ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第260集

栃木県教育委員会 2005『堀越遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第287集

栃木県教育委員会 2008『市ノ塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第303集

栃木県教育委員会 2015『市ノ塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第373集

日本窯業史研究所 1989『栃木県壬生町 宮の森集落遺跡群』

日本窯業史研究所 1992『上ノ原遺跡・向原南遺跡』

日本窯業史研究所 1997『殿山遺跡』

茨城県

茨城県教育財団 1998『南小割遺跡 権現堂遺跡 親塚遺跡 後原遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第129集

茨城県教育財団 2004『戸崎中山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第218集

茨城県教育財団 2005『辰海道遺跡4』茨城県教育財団文化財調査報告第247集

茨城県教育財団 2008『中峰遺跡 児松遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第286集

毛野考古学研究所 2011『茨城県笠間市 行者遺跡』

毛野考古学研究所 2011『笠間市文化財調査報告書 塙谷遺跡』2

千葉県

市原市文化財センター 1987『市原市下鈴野遺跡』市原市文化財センター調査報告書16

市原市文化財センター 2004『市原市山田橋大山台遺跡』市原市文化財センター調査報告書88

君津郡市文化財センター 1992『美生遺跡群1』君津郡市文化財センター発掘調査報告書71

君津郡市文化財センター 1993『美生遺跡群2第4・5・9地点』君津郡市文化財センター発掘調査報告書93

佐倉市遺跡調査会 1975『大崎台遺跡』

千葉県都市公社 1974『市原市大厩遺跡』

千葉県教育振興財団 2007『千原台ニュータウン』17 千葉県教育振興財団調査報告565

千葉県教育振興財団 2011『千原台ニュータウン』26 千葉県教育振興財団調査報告646

千葉県文化財センター 1979 『千葉市城の腰・西屋敷遺跡』 千葉県教育振興財団調査報告 22

千葉県文化財センター 1983 『千原台ニュータウン』 2 千葉県教育振興財団調査報告 58

千葉市埋蔵文化財センター 1998 『千葉市戸張作遺跡』 1

千葉市埋蔵文化財センター 1999 『千葉市戸張作遺跡』 2

群馬県・埼玉県

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995 『荒砥上ノ坊遺跡』 1 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 193 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982 『後張 関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 13』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 15